

[教育方法一般]

学びを生かす構えを育み、知識・技能の習得を促す教科等横断的な学習

－ 1冊のノート，各教科等固有の学び方，振り返りを横断的に位置付ける単元構成－

笠井 悠*

1 研究主題設定の理由

学習内容の関連を生かして教科等を関連付ける単元づくりを試みてきた。例えば，理科「雲と天気の変化」の学習後に，国語科で説明的文章（以下，説明文）「天気を予想する」（武田康男・光村図書5年）を読む単元である。児童は，理科で気候に関する用語と気候が変化する要因を理解し，雲画像を基に天気を予測することができた。その後に，国語科で「天気を予想する」を読み，語句の意味や図表の役割，筆者の主張を素早く理解した。教科等横断的な学習の素朴な実践とすることができる。

平成29年告示小学校学習指導要領（以下，新学習指導要領）の総則「教育課程の編成」には，新たな項目として，「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」が設けられた¹⁾。教育課程の構成要素の中核は，単元，及び授業である。したがって，今後，教科等横断的な視点に立った単元づくり，授業づくりが求められていくと捉えることができる。

また，『平成29年度全国学力・学習状況調査 質問紙調査報告書』（以下，『報告書』）²⁾は，「各教科等で身に付けたことを，様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けた」学校は，児童生徒の教科正答率が高く，「授業で学んだことを，ほかの学習や普段の生活に生かしている」児童生徒は，教科正答率が高いことを報告した。二つの傾向は関連しており，「各教科等で身に付けたことを，様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けた」学校は，「授業で学んだことを，ほかの学習や普段の生活に生かしている」児童生徒の割合が高い。つまり，教科等横断的な学習の実践によって，児童生徒に各教科等の学びを他の学習や生活に生かす構えが育ち，児童生徒が各教科等の知識・技能を着実に習得することを示唆する。

このように，教科等横断的な学習は，新学習指導要領で新たに位置付けられ，『報告書』で有効性の高さが示唆された現状から，今後，その実践がより求められると考えられる。その一つの方向が，教科等横断的な学習の単元，授業づくりによって，児童生徒に，学びを他の学習や生活に生かす構えを育てるとともに，各教科等の知識・技能の習得を促す実践である。この視点で考えると，冒頭で示したような学習内容のみを関連付けた教科等横断的な学習から，さらに踏み込んでいく必要を感じる。

これまで，教科等横断的な学習の在り方に関する実践的研究は，様々な発達段階の児童生徒を対象に行われている。高垣ら（2009）³⁾は，高等学校で，確率の概念を数学科，国語科，理科，社会科で扱い，各教科の文脈や知識，経験と関連付けて発展させ，課題を探究させる実践を報告した。「国語，理科，社会の全ての文脈において，ほぼ同程度に知的好奇心が活性化された。」と意欲の向上を成果に挙げている。石原（2016）⁴⁾は，小学校で，教科等を横断する「真正な課題に取り組みさせる」実践を報告した。児童が学習への主体性を高めたことを成果に挙げている。中村・大塚（2017）⁵⁾は，小学校で，国語科を中心に，各教科の学びを言語活動，題材，思考のつながりで関連付ける提案をした。「相互補完の関係になる」「理科だけの学習では興味がもてなかったけれど，国語の説明文を読むことで興味がもてる」と意欲の向上を成果に挙げている。

これらの先行研究からは，教科等横断的な学習の実践によって，児童生徒が，学習対象に対する関心を高め，主体的に学習活動を進めるようになることが分かる。一方で，学びを生かす構えを育て，各教科等の知識・技能の習得を促すことを目指した教科等横断的な学習の実践的研究は乏しく，その具体的な在り方が明らかになっていないと言えない。

そこで，研究対象を小学校における学習に定め，児童に，学びを生かす構えを育て，各教科等の知識・技能の習得を促すことができる教科等横断的な学習をつくりたいと考えた。特に，それらが成立する単元の在り方を明らかにしたいと考えた。

2 研究の目的

小学校において，児童に，学びを生かす構えを育て，各教科等の知識・技能の習得を促すことができる教科等横断的な学習の在り方を明らかにする。

3 研究の内容と検証方法

研究の目的を達成するために，次の三つの手立てを講じた教科等横断的な学習の単元を構想し，実践する。

*長岡市立上組小学校

(1) 1冊のノートを横断的に使用する

児童が、各教科等の学びを、自ら他の学習の中で生かしていく単元にする。そのような学び方のよさを実感でき、学びを生かす構えが育つからである。そのために、各教科等の学びを自ら生かしやすい学習環境に整えることが有効であるとする。

そこで、教科等横断的な学習の単元で、1冊のノートを使用する手立てを講じる。毎時間の学びを1冊に記録する。各教科等での学びをいつでも読み返し、生かすことができるようにする。ノートは全教科等で使用可能な方眼野5mmとする。

(2) 各教科等固有の学び方を横断的に展開する

児童が、各教科等ならではの学び方を実行していく単元にする。各教科等の知識・技能を得て、生かす活動ができ、習得につながるからである。そのために、単元で、各教科等の学び方の特質を重視した学習を展開することが有効であるとする。

そこで、教科等横断的な学習の単元で、各教科等固有の学び方を展開する手立てを講じる。一つの学習対象に対して、社会科では基礎的資料の読み取りから理解を深め、国語科ではそれに関する説明文の構成から筆者の主張を捉えて考えを形成し、道徳ではそれに関する事例を基により行為を考えるような学習を展開する。この展開で、各教科等の知識・技能の習得を促す。

(3) 学習の振り返りを横断的に記録する

児童が、各教科等の各時間での学習内容を自覚していく単元にする。自覚する過程で各教科等の学びが結び付き、児童の知識・技能の習得が促されるからである。そのために、各時間の学びを書き表す活動を積み重ねることが有効であるとする。

そこで、教科等横断的な学習の単元の各時間の終末に、振り返りを書く活動を行う手立てを講じる。その時間に考えた内容や習得した知識・技能、新たな疑問を書く。これを共通の視点として毎時間書き、各教科等の学びが結び付くようにする。

三つの手立ての有効性を、学級全体と研究対象児A児、B児の学びの様相を基に検証する。A児とB児は、本実践前のアンケート「ある教科で学んだことを、他の教科や生活に生かしている」に「△あまりあてはまらない」と答えた児童である。

学びを生かす構えの育ちは、授業記録でのノートを読み返す姿と前時までの学びを生かす様相、振り返りの記述内容、本実践前後のアンケート結果で検証する。各教科等の知識・技能の習得の促しは、授業記録での各教科等固有の学び方の中で知識・技能を生かす様相と学びを結び付ける様相、振り返りの記述内容、本実践の学習内容に関する単元テストの結果で検証する。

4 実践の概要

- (1) 単元名・単元指導計画 右表参照。
- (2) 学習者・実践期間
 - ・新潟県公立小学校第5学年A組24名
 - ・平成30年2月27日－3月19日

5 実践の結果と考察

単元開始の社会科1時では、当日朝からその時間までに得た「情報」を想起させた。その上で、「情報」の辞書的定義と教科書的定義を調べさせた。それらの情報の発信者と受信者を考える活動を通して、児童は、情報の発信者が多様であること、自身は受信者の場合が多く、情報に支えられて生活している現状に気付いた。情報に関する学習を始めることを伝え、単元名「くらしを支える情報～情報の伝えられ方と役割を理解し、生かし方を考えよう～」を示した。社会科と国語科、道徳を組み合わせ、配付した1冊のノートを使って学習することを伝え、振り返りを書く活動を行った。

以下では、実践の結果を示し、考察する対象として、情報の製作過程を理解し、マスメディアから受ける影響を考える学習（国語科3時から社会科5時）、情報との関わり方に関する主張を理解し、大切にすべきことを考える学習（社会科10時、国語科9時から道徳2時）、単元のまとめとしての意見文を書く学習（国語科10時、11時、12時）を取り上げる。

単元名	くらしを支える情報～情報の伝えられ方と役割を理解し、生かし方を考えよう～				
育てる知識技能	国語科	・主張と事例の関係は叙述から押さえ、文章の構成を捉えて要旨をまとめることができる。 ・自分の主張と事例を適切に関係付けて、筋道の通った意見文として書くことができる。			
	社会科	・放送、新聞などの産業は、国民生活に大きな影響を及ぼしていることが分かる。 ・情報の収集から発信までの過程を知り、情報産業が果たす役割を考え、表現できる。 ・情報を有効に活用することについて、情報の送り手と受け手の立場から多角的に考え、受け手として正しく判断することや送り手として責任をもつことが大切であることが分かる。			
	道徳	・各情報機器の特徴を理解し、それぞれを使用する際に気を付けるとよいことが分かる。 ・メールで情報を発信する時と受信した時に、気を付けるとよいことが分かる。			
主な学習材【概要】	学習材①「ニュース番組作りの現場から」（清水建宇・光村図書小学5年国語） [ニュース番組作りを、製作者が具体的に報告する説明文。取材内容選定から番組放送までを説明する。] 学習材②「情報社会に生きる私たち」（『私たちの道徳小学校5・6年』） [小学生の情報機器の使用実態のデータと主な問題事例を示す。問題の防止策を考えることを促す。] 学習材③「想像力のスイッチを入れよう」（下村健一・光村図書小学5年国語） [情報を受け取る時に大切にすべきことを主張する説明文。筆者がアナウンサーの経験に基づいて書いている。] 学習材④「知らない問の出来事」（『私たちの道徳小学校5・6年』）資料④あゆみの回想 資料⑤みかの回想 [思い込みを発端に、メールで誤った情報が広がった話。思い込みをされた子、した子の回想である。]				
	次	内容	全体時間	教科（教科別時間）	主な学習活動
1次	「情報」を知る。	1	社会科（1）	情報の種類を知る。	
		2	社会科（2）	大切な情報の入手方法を考える。	
		3	社会科（3）	テレビのニュース番組の作られ方を知る。	
2次	情報の製作過程を理解し、マスメディアから受ける影響を考える。	4	国語科（1）	学習材①を読み、学習の見通しをもち、語句の意味を調べる。	
		5	国語科（2）	三部構成を捉え、大体的内容を理解する。	
		6	国語科（3）	筆者の説明をより具体的に理解する。	
		7	社会科（4）	各マスメディアの特色を考える。	
		8	社会科（5）	マスメディアから受けている影響を考える。	
3次	情報ネットワークの仕組みと役割を理解する。	9	社会科（6）	図書館を事例に、情報ネットワークの仕組みを知る。	
		10	社会科（7）	病院での情報ネットワークの生かし方を知る。	
		11	社会科（8）	命を守ることを目的とした情報ネットワークを知る。	
4次	情報との関わり方に関する主張を理解し、大切にすべきことを考える。	12	社会科（9）	インターネットが生活に与えている影響を考える。	
		13	社会科（10）	インターネットが広がる社会で気を付けていくことを考える。	
		14	道徳（1）	学習材②を基に、情報社会に生きる私たち大切にすることを考える。	
		15	国語科（4）	学習材③を読み、学習の見通しをもち、語句の意味を調べる。	
		16	国語科（5）	三部構成を捉え、話題や筆者の主張を理解する。	
		17	国語科（6）	事例とその目的を理解する。	
		18	国語科（7）	筆者の主張を捉え、要旨をまとめる。	
		19	国語科（8）	筆者の主張をより具体的に理解する。	
		20	国語科（9）	筆者の主張をより具体的に理解する。	
		21	道徳（2）	学習材④を基に、思い込みが生み出す不利益とそれを防ぐ方法を考える。	
5次	情報を受け取る時に大切なことに関する考えを書く。	22	国語科（10）	筆者の主張とこれまでの学びを基に、自分の意見を書く。	
		23	国語科（11）	意見文を書く。読み合う。	
		24	国語科（12）	意見文を書く。読み合う。学習全体を振り返る。	

(1) 情報の製作過程を理解し、マスメディアから受ける影響を考える学習—国語科3時から社会科5時—

国語科3時では、学習材①から報道番組の製作過程を読み取った。児童は、社会科3時で習得した知識とは違い、製作開始から放送までに会議が2回あること、その2回の内容が異なることに気付いた。そこで、「2回の会議は、どのように違うのだろう。」と問うた。その後の授業記録を、次に示す。(以下、授業記録の発話は、授業者はT、複数の児童はC、児童個人はその他の同一アルファベットで表記する。段落番号は□、ページ数はP～、行数はL～で表記する。「と思う。」等は省略する。)

【国語科3時 学習材①「ニュース番組作りの現場から」 学習課題：2回の会議は、どのように違うのだろう。】

D：1回目はこの疑問を中心に取材しようという会議で、2回目は放送でどういう内容を中心に伝えるのかを決める会議。
(「1回目は2つの疑問を決め、2回目は内容の中心を決めた。」という主旨の発言が、E、F、G、H、I、Jからあった。)
K：1回目は聞くことを決める会議で、2回目は内容の中心と、誰にインタビューし、どこで撮影するのかを決める会議。
B：1回目は内容に何を入れるとよいか、2回目は1回目の会議と取材を基に、内容の中心を決めた。
A：1回目は取材のための会議、2回目は取材結果を基に、具体的に何を中心に伝えるのかという放送のための会議。

次時の社会科4時では、テレビの他に情報を一斉に、かつ大量に発信できるメディアとして、新聞、インターネット、ラジオを取り上げ、それぞれの特徴を考えた。それら4つのようなメディアを「マスメディア」と呼ぶことを教えた。

社会科5時では、アイドルグループの解散に関する同日の新聞記事を3社分示した。児童は、グループの解散という情報の一致に気付いた。加えて、解散の要因や過程に関する情報の相違に気付いた。受け取る情報次第で、出来事の印象が異なることを理解した。そこで、「発信される情報にこのような違いが出るのは、どうしてだろう。」と問うた。授業記録を、次に示す。

【社会科5時 学習課題：マスメディアからどのような影響を受けているのか考えよう。】

F：取材をするための質問が、それぞれ違ったから。
E：取材した内容が違ったから。
I：取材した相手が違ったから。
L：情報を伝える記者が違って、その人の表現によって文章が変わるから。
M：一番伝えたい内容が、各会社によって違うから。
A：作成した人が注目させたい部分が違うから。
(「発行元が大切だと思う情報、注目させたい情報がそれぞれ違ったから。」という主旨の発言が、N、O、G、F、K、L、Eからあった。)
T：発信された情報によって、受け手は影響を受けるのだよね。情報を受け取る側として大切にするとよいことは、どのようなことだろう。
I：全ての情報を真に受けないこと。
M：内容の中心に気を付けて、他の記事も見てみることに。
(「いろいろな記事やメディアから情報を受け取ることに。」という主旨の発言が、E、Pからあった。)
A：与えられた情報がすべてと思わずに、与えられていない情報の部分を考えること。

M児、N児、O児、G児、E児は、ノートを読み返して考えを書いた。児童は、取材相手(I児)や取材の質問(F児)、伝えたいことの中心(M児、N児、O児、G児、K児、L児、E児)が違うからであると考えた。国語科3時で、情報の発信者が取材での質問やインタビュー相手、取材場所、放送内容の中心を意図的に決めることを理解しており、その知識を生かして考えたことと捉えることができる。振り返りでは、O児「各新聞の伝えることは同じでも、細かく見ると違うことが書いてあった。取材の質問内容、一番伝えたい大切なことが違うからだと思った。」、Q児「取材の質問、答える人、取材する人によって、内容が全然違うことが分かった。会社によって伝えることの中心が違うことが分かった。」と書いた。O児は1回、Q児は7回、前時までのノートを読み返しながり返りを書いた。国語科3時と社会科5時で習得した知識を結び付けて自覚している。

A児は、国語科3時に「1回目は取材のための会議、2回目は取材結果を基に、具体的に何を中心に伝えるのかという放送のための会議。」と発言した。社会科5時では、発信される情報が違う理由を「作成した人が注目させたい部分が違うから。」と発言した。国語科3時の、情報の作成者が伝える内容の中心を決める、という学びを生かして考えている。振り返りは「新聞社は、考えがちがうことが分かった。他社の質問がどのくらいの割合でさいようされているかということも知りたい。」と書いた。取材者が取材の質問を作るという知識を生かし、他社の質問によって得た情報が生かされている可能性を考えている。

B児は、国語科3時に「1回目は内容に何を入れるとよいか、2回目は1回目の会議と取材を基に、内容の中心を決めた。」と発言した。社会科5時では、発信される情報が違う理由を「作っている人がちがう。同じ情報を取材しても、その表現にはばがあるから。」と書いた。国語科3時での、情報の作成者によって表現の仕方が変わる、という学びを生かして考えている。振り返りでは、ノートを読み返し、「記事ごとに書いてある内容がちがうのは、メリットとデメリットがあった。情報を発信する側だけでなく、受け取る人も大切にしなければいけないことがあることが分かった。」と書いた。国語科1～3時で理解した情報を発信する側の努力と、社会科5時の受信する側が大切にすべきことがあるという学びを結び付けて自覚している。

(2) 情報との関わり方に関する主張を理解し、大切にすべきことを考える学習—社会科10時、国語科9時から道徳2時—
 社会科10時では、まず、「サイバー犯罪等に関する相談件数の推移」(警察庁)の2013～2016年を円グラフ⁶⁾で示し、相談内容を、割合が高い順に読み取る活動をした。次に、問題の発生要因を問うた。「インターネットは顔が見えないから。」「直接確認ができないから。」「世界中とつながっていて、誰からも見られたり、簡単に逃げられたりするから。」と発言があった。最後に、各問題を防ぐ方法を話し合った。考察対象の「悪口を言われる、傷つけられる」問題に関する授業記録を、次に示す。

【社会科10時 学習課題：インターネットが広がる社会では、どのようなことに気を付ければよいのだろう。】

F：人のことはインターネットで書かない。
 D：SNSなどで文章があったら読むだけで、よくないコメントを書かない。
 P：その言葉で誰かが傷つくことを送信する前に考える。
 R：自分で書いたことが悪口ではないかを確認する。
 E：何気なく書き込んだことが受け取り手には違う意味で伝わるかもしれないから、誤解を生むようなことは書かない。

次時の道徳1時では、学習材②を使い、情報機器を使う上で大切なことを、各機器の特徴とトラブルの事例を基に考えた。

そして、国語科で学習材③を読む学習に入った。国語科8時では、筆者が、情報を受け取る時に大切にすべきだと主張する内容を読み取った。①メディアが伝えた情報について冷静に見直すこと、②伝えていないことにも想像力を働かせること、③結論を急がないこと、である。国語科9時では、筆者は大切な順に①～③を書いているのかを問うた。「違う。」という応答に加え、P児「一番は③だ。『最後に、一番大切なのは』とあって、③の説明が始まっているから。」という発言があった。「では、二番目は、①と②のどちらなのだろう。」と問い、考えを書かせ、話し合いに入った。その授業記録を、次に示す。

【国語科9時 学習材③「想像力のスイッチを入れよう」 学習課題：筆者が二番目に大切だと考えていることは①と②のどちらなのだろう。】

I：①だ。①は、ボリュームがあるから。大切にすべきことが具体的に2つ書いてあるから。
 A：①だ。P182の大きな事例に対して④で「まず、ここで大切なのは」とあり、大きな事例に対して一番に説明しているし、文量が多い。
 D：②だ。①は「冷静に見直すこと」しかないけれど、②は「冷静に見直すことの他にも」とあって、大切にすることが加えられているから。
 (「②は①の内容を含んでいるから、②の方が大切であると考えている。」という主旨の発言が、S、F、Hからあった。)
 P：②だ。P182L3の「先ほどの図で言えば図③を想像できなくても図①や②で」とあり、それとつなげて大切なことを言うと考えると②だ。
 (「図と結び付けて主張しており、題名『想像力のスイッチを入れよう』とつながりがあるから。」という主旨の発言が、M、Uからあった。)
 B：②だ。大切という言葉がたくさん出てくるし、①もまとめて説明しているから。事例を複数使い、より詳しい説明になっている。
 T：筆者は、大切な順で書いていないのだね。では、①、②、③は、どのような順で書かれているのだろう。
 (「常識的な順。」「分かりやすさ。先に知っておかないとその先が分かりにくい。」「考えてほしい順。」という発言があった。)

道徳2時では、この学習材③の主張と関連がある事例を基に学習することを提案し、学習材④資料①を配付した。転入生あゆみさんは、事実ではない情報のメールが回った出来事に困っていることを確かめた。それが回った要因を問うと「仲間外れにされていたと思われたから。」「メールが回る中で大げさになったから。」と意見が出た。今度は、メールを回したみかさんの回想から考えることを提案した。学習材④資料②を配付し、メールが回った要因を改めて問うた。授業記録を、次に示す。

【道徳2時 学習材④「知らない間の出来事」 学習課題：思い込みによる不利益を防ぐためには、どうすればよいのだろう。】

J：みかさんが推測したことをメールに書いたから。
 (「みかさんが推測をメールで送ってしまったから。」という主旨の発言が、K、Dからあった。)
 B：みかさんの「友達いないみたい」という思い込みの印象が、少しずつ言葉を変えられて悪口になった。
 (「みかさんが思い込みをメールで送り、その内容が悪く変わっていったから。」という主旨の発言が、R、L、P、G、Iからあった。)
 T：どうすれば、防ぐことができたと考えますか。
 A：みか本人は間違えたメールを送らないで、他の人はそのメールが来ても「ふーん。」で止めて他の人に送らなければよかった。
 Q：「携帯を持っていない＝友達がいらない」という間違っている可能性があり、実際に間違っている推測は、しない。メールで送らない。
 (「推測をしない。それをメールで送らない。」という主旨の発言が、V、Oからあった。)
 U：自分の推測したことをメールにしないで、友達に言いたい場合は会って話す。
 N：みかさんは、あゆみさんのことが心配なら電話番号を教えてもらったのであゆみさんの家に直接電話すればいい。
 (「みかさんは、あゆみさんが心配なのであれば、電話で確認すればいい。」という主旨の発言が、H、Wからあった。)

Q児、V児、U児、H児は、ノートを読み返して考えを書いた。メールが回った要因を、推測を送信したこと(J児、K児、D児)、内容が変わっていったこと(B児、R児、L児、P児、G児、I児)と考えた。社会科10時の「悪口を言われる、傷つけられる」問題への対策「誤解を生む表現を避ける」を生かして考えている。防ぐ方法は①推測や思い込みを送らない(Q児、V児、O児)、②受け手は容易に信じない(A児)、③直接確かめる(U児、N児、H児、W児)と考えた。①は社会科10時の「発信する言葉を考える」という知識、②は国語科9時での筆者の主張の理解、③は社会科10時での「インターネットの問題点」の理解を生かしている。振り返りでは、V児「納得したのは、メールじゃなくて会って話せばよかったというので、

いあてはまる」になった。単元全体の振り返りで、R児は「このノート1冊で多くの大切なことを学びました。特にメディアの伝え方によってとらえ方が違うことです。例えば、社会と国語の情報の学習です。もう一つは道徳の『知らない間の出来事』です。みかがあゆみを心配して送ったメールが、伝え方ととらえ方によってマイナスの方向へいき、二人ともいやな思いをすることになりました。考えてメールを送りたいです。このノートで学んだことを6年生でも活用したいです。」と書いた。学びを、生活と次学年の学習で生かす構えをもっている。加えて、1冊のノートで学習を進めたことを肯定的に意味付けている。各時間でのノートを読み返す姿とアンケート結果、R児のような振り返りから、1冊のノートを横断的に使用する手立ては、有効であった。

成果の二つ目は、児童が各教科等の知識・技能を着実に習得したことである。表2は、本実践の国語科と社会科の学習内容に関する単元テストの結果である。「学級平均」は本実践の単元テストの平均得

【表1 各教科等の学びを他の学習や生活に生かす学習の経験、学びを生かす構えの育ち】

質問項目	◎	○	△	×
(実践前) ある教科などで学んだことを、他の教科や生活に生かす学習をしたことがある。	2/24	14/24	8/24	0/24
(実践後) ある教科などで学んだことを、他の教科や生活に生かす学習ができた。	7/24	17/24	0/24	0/24
(実践前) ある教科などで学んだことを、他の教科や生活に生かしている。	7/24	10/24	7/24	0/24
(実践後) ある教科などで学んだことを、他の教科や生活に生かしている。	11/24	13/24	0/24	0/24

【表2 本実践の国語科と社会科の学習内容に関する単元テストの結果】

	国語科「想像力のスイッチを入れよう」	社会科「情報を支える人々」			社会科「広がる情報ネットワーク・情報を生かすわたしたち」		
	読み	知識	技能	思考・判断・表現	知識	技能	思考・判断・表現
学級平均	95.9	94.8	98.6	98.2	99.2	95.6	97.8
その他平均	87.4	89.8	90.5	90.2	89.8	90.5	90.2
期待値	82.0	84.0	84.0	82.0	84.0	86.0	82.0

点率、「その他平均」は本単元テスト以外の単元テストの平均得点率、「期待値」は発行所の期待得点値⁷⁾である。なお、本実践の単元テスト実施前に、復習は一切行わなかった。国語科、社会科ともに、全領域で本実践の単元テストの平均得点率が、「その他平均」、「期待値」を大きく上回っている。「期待値」からは9.6～16.2%高く、「その他平均」からは5～9.4%高い。単元全体の振り返りで、L児は「インターネットは便利だけど裏の危ない部分があることが分かった。また、図書館や病院なども情報ネットワークでつながっていることにおどろいた。道徳で、大切なことを伝えたい時には、メールではなく直接会って話すとよいことが分かった。3つの教科で同じことを学習することにおどろいたが、いっしょにやることで情報に関する知識が深まったと思う。マスメディアはすべてのことを信じないで、一度確かめてから信じることを一番大切にしていきたい。インターネットを通して誰かを苦しめることや相手がいやな思いをする言葉は絶対に使わないことも大切にしたい。情報で学んだことを生かして生活していきたい。」と書いた。一つの学習対象に対して、社会科、国語科、道徳それぞれの学び方を実行することによって、知識が深まったことを自覚している。本実践に関する単元テストの結果と各時間での振り返りを書く中で知識・理解が結び付いた記述内容、L児のような振り返りから、各教科等固有の学び方を横断的に展開する手立てと学習の振り返りを横断的に記録する手立ては、有効であった。

これら二つの成果から、学びを生かす構えを育て、知識・技能の習得を促す教科等横断的な学習において、1冊のノートの使用、各教科等固有の学び方の展開、学習の振り返りの記述を、横断的に位置付ける手立ては有効であると言えることができる。

一方で、課題の一つは、児童の問題意識を横断的に位置付ける単元にすることである。本実践においては、学習内容に関連がある複数の学習材を、授業者が適切であると判断した時に提示し、児童の問題意識をつないだ。学びを生かす構えをより確かに育てるためには、児童の問題意識を学習の展開の中核にし、学びを生かす経験を児童の側から生み出すことが必要である。

もう一つは、児童が1冊のノートへの前時までの記録を、その時間の学習に生かす必然性を感じる学習活動を行うことである。ノートを読み返した児童が前時までの学びを生かす様相は、確かにあった。しかし、単元の後半でもノートを読み返さず、前時までの学びを生かすことができない児童もいた。読み返し、学びを生かすことを促すための学習活動の工夫が必要である。

【引用文献・註】

¹⁾ 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』、東洋館出版、2018年、pp.18-19

²⁾ 文部科学省 国立教育政策研究所『平成29年度全国学力・学習状況調査 質問紙調査報告書』、2017年、p.10、p.18、p.27

³⁾ 高垣マユミ、田爪宏二、三島一洋「教科等横断的な視点を導入した教授方略による動機づけの変化」、日本認知科学会第26回大会、2009年

⁴⁾ 石原陽子「国語科を核とした教科横断的な学習に関する研究」、プール学院大学研究紀要、2016年、pp.149-161

⁵⁾ 中村和弘・大塚健太郎『学級担任のための カリキュラム・マネジメント』、文溪堂、2017年、p.16、p.121

⁶⁾ 警察庁「平成28年中におけるサイバー空間をめぐる脅威の情勢等について」、2017年、pp.15-16を基に作成。

⁷⁾ 日本標準「社会Aテスト 5年 下巻」、2017年